小・中学生の二人きょうだい関係に関する研究
Two-Sibling Relationships among Elementary School Children and Junior High School Children

磯崎　三喜年 ISOZAKI, Mikitoshi
● 国際基督教大学
International Christian University

Keywords きょうだい関係，親密さ，葛藤，自己評価維持，年齢差
Sibling relationships, intimacy, conflict, self-evaluation maintenance, age difference

ABSTRACT

本研究は，小・中学生のきょうだい関係，特に，小・中学生が，きょうだい関係をどのように認知しているか，またきょうだい関係において自己評価維持の傾向が見られるかどうかを検討した．参加者は，公立小学校の児童228名（男109名，女119名），および公立中学校の生徒188名（男101名，女87名）であった．参加者は二人きょうだいを対象とし，これらの参加者に対して質問紙調査が実施された．その結果，全体として，小・中学生は，きょうだい関係をポジティブに捉えていた．自己評価維持の傾向は，見られなかった．小学生の第一子は，自己にとって高関与・低関与いずれの項目でも，自らをよりポジティブに評定していた．また，これと対応するように，小学生の第二子は，自己にとって高関与・低関与いずれの項目でも，自己をよりネガティブに評定していた．こうした，いわゆる長幼の序的傾向は，中学生では見られなかった．男女差について見ると，女子の方が男子より，きょうだい関係をよりポジティブに捉えていた．また，きょうだい間の年齢差も，きょうだい関係に影響していた．

Sibling relationships among elementary school children and junior high school children, especially on *how* respondents perceive their sibling relationships and whether they show self-evaluation maintenance tendencies in sibling relationships, were examined. Respondents were two hundred and twenty-eight (109 male, 119 female) public elementary school children and one hundred and eighty-eight (101 male, 87 female) public junior high school children. Questionnaires were administered to these respondents *who were only two siblings* in the family. The results showed that respondents perceived their sibling relationships rather favorably. But they did not show self-evaluation maintenance tendencies. Firstborn respondents among elementary school children rated themselves better than their sibling both on highly self-relevant items and on less relevant items. Correspondingly, second born respondents among elementary school children perceived themselves more negatively both on highly self-relevant items and on less relevant items. This tendency, where the young honor their siblings was not found among junior high school children. Female respondents perceived their sibling relationships more positively than male participants. Age differences between two siblings also influenced sibling relationships.

子どもたちは，さまざまな対人的ネットワークの中で，互いに影響しあいながら生活している．そうした対人的ネットワークの中で，自他の特性を把握し，自らの個を生かしながら，社会的な適応を図っていく．自己は，まさにこうした身近な他者とのやりとりの中で成り立っていくと言えよう．その過程において，特に重要な役割を果たすのが，親子関係やきょうだい関係を中心とした家族関係であり，地域社会における友人関係である．相対的には，子どもの年齢が小さいほど，親やきょうだいを中心とした家族関係の持つ意味は大きいと思われる．

子どもは，意識すると否とにかかわらず，親の働きかけやきょうだいとの接触によって，ものの見方や考え方，振る舞い，興味や関心，物事に対する取り組み方など，さまざまな影響を受ける．ある側面で，きょうだいが似た特性や行動を示しながら，別の側面では，まったく違った特性や行動を示すこともある．しかし，そうした類似性や差異性の諸側面こそが，きょうだい間でのやりとりにおける力動性を意味しているように思われる．また，成長に伴って，親やきょうだい相互のやりとりだけでなく，近隣の仲間関係や友人関係を形成し，親やきょうだいとの関係とはまた別の世界を作り上げていく．つまり，成長と共に，より多様な関係を築きつつ，逆に，親やきょうだいとの関係を再構築していく存在でもある．その意味では，そうした成長と社会化の過程において，親やきょうだいに対する捉え方や関係の様相も変化してくると思われる．

ここでは，きょうだい関係について検討したい．きょうだい関係は，対人的な結びつきの基礎をなすものであり，個人の適応とも密接に関わっている．きょうだいの存在およびきょうだいとの日常的な関わりによって，情報や経験を共有でき，知らず知らずのうちに，きょうだいから有形無形の刺激を受けることができる．それらは，目に見えない援助や励ましとなることもある．また，きょうだい間においては，競争心やライバル意識が生じることもあり，遊びの場面での優先順位や好みをめぐってけんかが起こることもある．その意味で，きょうだいの存在は，軋轢や葛藤を生み出すものでもある．つまり，きょうだいとのやりとりは，支持的・親和的なものばかりでなく，対立や葛藤を生じさせるものでもある．いずれにせよ，こうした多様な経験を積むことができるという点で，きょうだい関係の持つ意味は大きいと言える．

このように，きょうだいの存在は，子どもの社会化や友人関係をはじめとした対他者関係に重要な役割を果たすとともに，きょうだいの双方にとって，自己を見つめる貴重な機会を提供してくれる．きょうだい関係において，子どもは自己をどう位置づけ，きょうだいとの関係をどのように調整していくのか，あるいは，どのようなきょうだい関係を志向するのか，興味深い．というのは，きょうだいのそれぞれが，自己の志向性を伸ばすことによって，きょうだいの双方が心地よい関係を作り出すことができる場合もあれば，逆に，きょうだい間に競争や葛藤をもたらすこともあると思われるからである．例えば，志向性が同じで，そこでの達成度が類似しているほど，互いを意識しやすくライバル意識も生じやすい．また，これらの点は，きょうだい構成，出生順位，きょうだい間の年齢差なども関わってくる．

例えば，きょうだい間の年齢が離れていると，年齢の近いきょうだいよりもきょうだい相互の直接的な接触は相対的に少ない．その意味では，適度な距離があるといえるかもしれない．その場合，結果として，きょうだい間の葛藤や対立は，年齢が近いきょうだいに比べると少ないように思われる．さらに，きょうだい構成を考慮すると，きょうだい間の親密さや，ライバル意識は，また違った様相を示すかもしれない．

就学前の子どもを対象とした，きょうだい構成に関するDunn（1983）の研究によれば，同性きょうだいの方が異性きょうだいよりも友好的な相互作用が見られたという．また，塩田・大橋（1958）は，小・中学生を対象とした研究において，次のような結果を得ている．①年下の

きょうだいよりは年上のきょうだいに対してより好意的であり，またけんかをすることも少ない．②年齢の接近しているきょうだいよりも離れているきょうだいに対して好意的であり，またけんかをすることも少ない．③異性のきょうだいよりは，同性のきょうだいに対してより好意的であるが，どちらとよりけんかをするかということについては，はっきりしない．

ここで興味深いのは，①と②の結果である．まず，①について，塩田・大橋は，小・中学生という年齢段階では，子どもたちは，世話をすることよりもされることをより望み，依存できる対象という点によりきょうだいの意義を認めている，と考察している．また，②の結果は，年齢が接近しているといろいろな点で競争や対立が生じやすいことに起因している，と考察している．なお，きょうだい構成について言えば，異性きょうだいの場合でも，男子と女子では，きょうだいに対する捉え方やきょうだい関係の認知は，異なったものとなる可能性がある．

きょうだい間に生起するさまざまなことがらについて，例えば，Manaster & Corsini（1982）は，年齢が離れていると，第一子は第二子を競争者とは見なさないため，脅威を感じないとしている．そして，概して第一子は，自分が一人っ子であったときの「古きよき日々」に憧れ，かつての優越した地位を保持する権利があると感じ，その優越性を維持しようとするという．これに対し，第二子は，第一子に追いつこうとして，より高度の活動性を示す傾向があるとしている．また，第二子は，第一子が弱い分野において頭角をあらわそうと努力するという興味深い指摘をしている．つまり，第一子との競争が少なく成功する可能性が高い分野を選ぶ傾向があるというのである．

こうした第一子に見られる優越性と第二子の活動性に関しては，Tesser（1980）や，Tesser（1984）の自己評価維持（self-evaluation maintenance : SEM）モデルの視点から論ずることができるように思われる．Tesser（1980）による大学生の二人きょうだいを対象とした研究1では，男性どうしのきょうだいにおいては，モデルの予測に沿った結果が得られている．ここでは，研究の参加者に人気度や容貌などの項目を評定させ，当該項目における評定値が，自分のきょうだいを上回っており，しかもきょうだいとの年齢差が小さいとき，参加者はきょうだいと行動の仕方が似ていると回答していたのである．つまり，同一視がより大きくなっていた．逆に，自分が，きょうだいよりも下回っているとき，参加者は，自分ときょうだいは似ていないと回答する傾向が見られた．なお，この場合，きょうだい間の年齢差が3歳未満のとき，こうした自己評価維持傾向が見られたという．しかし，きょうだいとの年齢差が3歳以上になると，きょうだいとの心理的な近さが低下するため，自己評価維持をそれほど志向しないことが示唆されている．また，女性どうしのきょうだいにおいては，モデルの予測は支持されていない．したがって，結果は限定的なものとなっている．さらに言えば，同一視の程度の指標が有効かどうかについても議論の余地があるかもしれない．

続いて，きょうだい間の軋轢について同じ大学生二人きょうだいを対象に検討したTesser（1980）の研究2においては，男性きょうだい，女性きょうだいいずれもモデルの予測に沿った結果が得られている．つまり，参加者の出来具合の評定が，自分のきょうだいを上回っているときは，きょうだい間において軋轢を感じる度合いは低くなっている．これは，Manaster & Corsini（1982）の指摘と符合している．その意味で，子どもが，きょうだいとの関係で，自己を肯定的に捉えることができるかどうかは，きょうだい関係の良し悪しに密接に関わってくるように思われる．

また，吉田・平林・廣岡・斎藤（1989）は，親の態度がきょうだい間の関係，きょうだいへの感情に与える影響に着目し，きょうだい間において生起する葛藤場面をいくつか取り上げ，きょうだいげんかへの親の対処法とそれに対する満足度を検討している．そして，親の対処法を両成敗型と認知している子どもの方が，きょ

うだいに対し，好意的な感情を持っているとしている．これは，親のあり方や子どもに対する態度の公平さが，きょうだい関係に影響を与えることを示している．

また，Stoneman & Brody（1993）は，小学生から中学生の同性二人きょうだいのペアを対象に，きょうだいの気質ときょうだい関係について検討している．その結果，きょうだい間の負の感情と葛藤は，きょうだい双方の活動性がともに高く，また年上のきょうだいが年下のきょうだいより活動性が高いときにより強まることがわかった．

このほか，Stocker, Lanthier & Furman（1997）は，大学生を対象にきょうだい関係について，質問紙を用いて検討している．その結果，大学生のきょうだい関係は，温かさ，葛藤，ライバル意識の3つの次元によって特徴づけられること，また，これらの次元において生じる個人差は，例えばきょうだい間の接触の頻度やきょうだいの精神衛生と関連していることが示されている．

このように，きょうだい関係については，さまざまな年齢にわたって検討がなされている．すでに触れた自己評価維持の視点からは，大学生を対象に，きょうだい関係について自由回想による検討を試みた研究（磯崎，2004）もある．ここでは，きょうだい間における葛藤やライバル意識，あるいは競争について，自己評価維持の視点からある程度説明が可能であることがうかがえた．また，きょうだい間で志向性が類似していることが，ライバル意識を生みやすいことも示唆されている．

このように，きょうだい間の葛藤やライバル意識には自己評価維持の心理機制が関わっていると推測される．また，親密な二者間における Beach & Tesser（1995）の拡張自己評価維持（extended self-evaluation maintenance : ESEM）モデルの考え方によれば，きょうだいの一方だけでなく，きょうだい双方の自己評価が維持されることがより重要であり，そうした関係こそが安定した心地よい関係であると推測される．

自己評価維持の視点からいえば，関与度が高い領域がきょうだい間で競合していると葛藤や軋轢をもたらしやすいため，きょうだいのいずれかが，関与度の高い領域を変更する，または関与度の高い領域を下位領域に分ける，さらには，きょうだい間で適度な距離を保つなどの方策をとることによって，きょうだい関係がより良好なものとなると考えられる．

小・中学生の友人関係を扱った研究においては，学業成績と友人関係との間に，自己評価維持から予測される関係が見られる（例えば，磯崎・高橋，1988，1993など）．

ここで，小・中学生段階におけるきょうだい関係において，自己評価維持に合致した傾向が見られるかどうかは，重要な検討課題となる．というのは，この年齢段階では，きょうだい相互に重要な領域が重複しがちである．友人のように選択的な関係ではなく，いわば与えられた関係において，こうした調整を行うことはかなり難しいようにも思われる．その意味で，きょうだい関係について，学業だけでなく，より一般的な領域にまで関与度の対象を広げ，自己評価維持傾向が見られるかどうかは，興味のあるところである．

したがって，小・中学生のきょうだい関係を取り上げ，きょうだい関係についての認知，およびきょうだい間における自己評価維持について検討を行うことにする．ここでは，きょうだい関係の基本形態として二人きょうだいを取り上げることにした．

方　法

調査対象者　小学生は，公立の小学校4年生および小学校6年生を対象に調査を行った．二人きょうだいの対象者は，228名（男109名，女119名）であった．中学生は，公立の中学校2年生を対象に調査を行った．二人きょうだいの対象者は，188名（男101名，女87名）であった．

質問項目　まず，「あなたのきょうだいについておたずねします」として，回答者の属性（性，年齢など）ときょうだいの人数，そして回答者自身がその何番目にあたるかを尋ねた．そして，

きょうだいのうち，誰を対象として，質問に答えるかを確認させた．ここでは，二人きょうだいのため，回答者は，自分以外のもう一人のきょうだいについて回答した．つまり，例えば，回答者にとってきょうだいが年上（下）で男（女），年齢が15（17）歳の場合，自分のきょうだいを「兄」（妹），年齢は「15歳」（17歳）のように記入した上で，その後の質問項目へと進むことになる．なお，質問項目の内容は，小学生と中学生で，基本的に同一であったが，小学生を対象とした質問項目についてのみ，難しいと思われる表現はよりわかりやすい表現に改めた．また，必要に応じ，難しいと思われる漢字をひらがなに改めた．

質問項目は，概略，以下のような項目群から成っていた．つまり，きょうだい評定に関する質問項目，自分にとって重要な（関与度の高い）ことがら及びそれほど重要でない（関与度の低い）ことがらに関する質問項目，そして，きょうだい関係についての質問項目から成っていた．

まず，きょうだいについての評定項目は，以下の6項目であった．きょうだいのうち，どちらが，①ものをたくさんもっている（以下，ものもち），②いろいろなことができる（以下，能力），③人気がある（以下，人気），④かっこいい，またはきれい（以下，格好いい），⑤家の手伝いをする（以下，手伝い），⑥成績がよい（以下，成績），である．これらの項目についていずれも5段階評定を求めた（「1：ぜったいきょうだいの方」から「5：ぜったい自分の方」）．「3」は，尺度の中間値であり，この値を超えるほど，自分を高く評定していることになる．

次に，自分にとって重要な（関与度の高い）ことがらについて尋ねた．すなわち，上で述べた①から⑥の項目のうち，「きょうだいに負けたくないと思うだいじなもの」は何かを回答者に尋ね，それを順に2つ挙げさせた．ここで挙がってくる項目を，回答者にとっての高関与項目とした．また，「きょうだいに負けても別にかまわないと思うもの」について順に2つ挙げさせた．これを，回答者にとっての低関与項目とした．同様に，「あなたのきょうだいだったら」これら①から⑥のうち，「どれに負けたくないと答えると思うか」を推測させ，順に2つ挙げさせた．これを，推測高関与項目とした．また「あなたのきょうだいだったら」，これらのうち，「どれに負けてもいいと答えると思うか」を推測させ，順に2つ挙げさせた．これを推測低関与項目とした．なお，これら高・低関与項目，推測高・推測低関与項目の質問については，「なければ書かなくてよいです」と明記し，回答の強制を避けるようにした．

さらに，自分のきょうだいやきょうだいとの関係について，以下の14項目に5段階評定を求めた．①勉強や運動などのできぐあいがどのぐらい似ているか（出来具合の類似性：「1：似ていない」から「5：似ている」の5段階評定で，数値が大なほどポジティブ），②いろいろな行動の仕方の類似性（行動の類似性），③ものの考え方や感じ方の類似性（感じ方の類似性），④興味や関心の類似性（興味の類似性），⑤きょうだいが自分に対し，興味や関心を示し，手伝ってくれる程度（関心支持），⑥競争の程度（競争）「1：競争しない」から「5：競争する」で，数値が小なほどポジティブ．⑦きょうだいが好き（きょうだい好き），⑧仲のよさ，⑨一緒に行動したい程度（きょうだい一緒），⑩一緒だと楽しいと思う程度（楽しさ），⑪話をしたり，顔をみたくないと思う程度（回避），⑫けんかする程度（けんか），⑬きょうだいがいないとさみしい（不在寂しい），⑭よく話したり一緒に遊んだりする程度（話・遊び）．

すでに述べたように，各項目とも，基本的に数値が大きいほどポジティブであるが，⑥競争，⑪回避，⑫けんかの3項目のみ，数値が小さいほどポジティブな評定となっている．つまり，数値が小さいほど，競争や回避，けんかの程度が小であることを示している．

手続き　基本的に，クラスごと集団で一斉に質問紙を配布し，回答を得た．ただし，時間の関係で，回答が困難な場合は，後日回収を行った．

結　果

小学生228名のうち，第一子は106名，第二子は122名であった．また，中学生188名のうち，第一子は85名，第二子は103名であった．

なお，高関与項目，低関与項目は，いずれもそれぞれ２項目の平均値を分析に用いた．推測高関与項目，推測低関与項目も同様に，それぞれ２項目の平均値を分析に用いた．

１．きょうだい関係の認知について

小・中学生全体のきょうだい関係の認知およびきょうだいに対する評定の結果を表１に示した．また，きょうだい関係認知の項目を因子分析（最尤法バリマックス回転）した結果，表２のように，３因子が抽出された．第一因子は，きょうだい仲のよさに関する因子，第二因子は，きょうだい間の類似性に関する因子，第３因子はきょうだい間のけんかの因子であった．

表１　小・中学生全体のきょうだい関係の認知ときょうだいに対する評定

	N	平均値	標準偏差
ものもち	414	3.01	1.111
能力	415	2.98	1.138
人気	414	2.90	.870
格好いい	411	2.98	.798
手伝い	415	3.18	1.219
成績	410	2.86	1.204
似出来具	411	2.71	1.101
似行動	415	2.71	1.080
似感じ方	414	2.56	1.085
似興味	413	2.63	1.201
関心支持	415	2.71	1.183
競争	414	2.84	1.153
兄弟好き	415	3.42	1.023
兄弟仲	415	3.20	1.020
兄弟一緒	414	3.00	1.081
楽しさ	414	3.36	1.028
回避	414	2.55	1.136
けんか	415	3.47	1.162
不在寂し	415	3.86	1.099
話・遊び	415	3.21	1.114

表2　きょうだい関係認知の因子分析

	因子		
	1	2	3
似出来具	.098	.544	−.042
似行動	.185	.536	−.057
似感じ方	.154	.648	.069
似興味	.239	.526	−.014
関心支持	.375	.419	−.011
競争	.015	.142	.327
兄弟好き	.838	.155	−.186
兄弟仲	.666	.302	−.234
兄弟一緒	.677	.288	−.099
楽しさ	.822	.214	−.042
回避	−.403	−.227	.397
けんか	−.210	−.195	.677
不在寂し	.694	.109	−.159
話・遊び	.654	.289	.116

因子抽出法: 最尤法
回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

表1および表2より，きょうだいが好き，一緒だと楽しいなど，きょうだい仲のよさは，中間値の3を上回り，全体としてポジティブなものとなっている．また，きょうだいとの接触を回避しようとする傾向もあまり見られない．ただし，きょうだいとはさまざまな側面で，それほど似ているとは捉えていない．また，けんかもある程度はしていると回答している．

出生順別に見た小学生のきょうだい関係の認知　小学生のきょうだい関係については，第一子が第二子より，きょうだいが自分に対し，興味や関心を示し，手伝ってくれる（第一子：M=2.98, SD=1.23, 第二子：M=2.64, SD=1.20, t=2.12, df=226, p<.05），よく話したり一緒に遊んだりする（第一子：M=3.57, SD=1.14, 第二子：M=3.12, SD=1.07, t=3.02, df=226, p<.01）と答えている．その一方で，第一子は，第二子より，けんかすると認知している（第一子：M=3.73, SD=1.07, 第二子：M=3.42, SD=1.18, t=2.06, df=226, p<.05）．その他の項目では，第一子と第二子との間で有意差は見られない．

出生順別に見た中学生のきょうだい関係の認知　中学生のきょうだい関係については，第一子が第二子より，きょうだいが自分に対し，興味や関心を示し，手伝ってくれる（第一子：M=2.81, SD=1.12, 第二子：M=2.44, SD=1.11, t=2.27, df=185, p<.05）と認知している．その一方，第一子は，第二子より，きょうだい関係をより競争的（第一子：M=2.88, SD=1.21, 第二子：M=2.51, SD=1.08, t=2.21, df=184, p<.05）と捉え，また，けんかすると認知している（第一子：M=3.60, SD=1.21, 第二子：M=3.17, SD=1.21, t=2.45, df=185, p<.05）．その他の項目では，第一子と第二子との間で有意差は見られない．

小学生のきょうだい関係認知における男女差　小学生のきょうだい関係認知を男女別に見ると，④興味の類似性（男子：M=2.61, SD=1.23, 女子：M=2.92, SD=1.19, t=1.98, df=225, p<.05），⑤関心支持（男子：M=2.61, SD=1.18, 女子：M=2.97, SD=1.24, t=2.19, df=226, p<.05），⑦きょうだい好き（男子：M=3.28, SD=1.16, 女子：M=3.79, SD=.96, t=3.65, df=226, p<.01），⑨きょうだい一緒（男子：M=2.96, SD=1.15, 女子：M=3.45, SD=1.13, t=3.18, df=225, p<.01），⑩楽しさ（男子：M=3.25, SD=1.08, 女子：M=3.74, SD=1.09, t=3.39, df=225, p<.01），⑬不在寂しい（男子：M=3.75, SD=1.16, 女子：M=4.16, SD=1.09, t=2.74, df=226, p<.01），の各項目で有意差が見られた．いずれも女子が男子より，きょうだい関係をポジティブに捉えていた．

中学生のきょうだい関係認知における男女差　中学生のきょうだい関係の認知を男女別に見ると，③感じ方の類似性（男子：M=2.35, SD=.98, 女子：M=2.72, SD=1.14, t=2.42, df=185, p<.05），④興味の類似性（男子：M=2.29, SD=1.09, 女子：M=2.66, SD=1.22, t=2.14, df=184, p<.05），⑤関心支持（男子：M=2.40, SD=1.08, 女子：M=2.84, SD=1.14, t=2.70, df=185, p<.01），⑦きょうだい好き（男子：M=3.00, SD=.90, 女子：M=3.60, SD=.83, t=4.71, df=185, p<.01），⑧仲のよさ（男子：M=2.96, SD=.97, 女子：M=3.32, SD=.90, t=2.63, df=185, p<.01），⑨きょうだい一緒（男子：M=2.62, SD=.90, 女子：M=2.89, SD=.91, t=2.01, df=185, p<.05），⑩楽しさ（男子：M=2.99, SD=.88, 女子：M=3.38, SD=.85, t=3.06, df=185, p<.01），⑬不在寂しい（男子：M=3.49, SD=1.10, 女子：M=4.01, SD=.90, t=3.53, df=185, p<.01），⑭話・遊び（男子：M=2.82, SD=1.03, 女子：M=3.36, SD=1.10, t=3.46, df=185, p<.01）の各項目で有意差が見られた．いずれの項目も女子が男子より，きょうだい関係をポジティブに捉えていた．

きょうだい構成によるきょうだい関係認知について　小・中学生全体で見ると，女同士のきょうだいは，きょうだい仲がよく，また，きょうだいと一緒に行動したいと回答している（きょうだい仲：M=3.30, SD=1.07, p<.01, きょうだい一緒：M=3.33, SD=1.11, p<.01, いずれも中間値3との差の検定による）．逆に，男同士のきょうだいは，きょうだいからの関心支持が低いと認知している（M=2.60, SD=1.15, p<.01, 中間値3との

差の検定による).

同様に，異性きょうだいで見ると，男子は，異性きょうだいからの関心支持が低く，一緒に行動したいと思わないと答えている（関心支持：M=2.41, SD=1.13, p<.01, きょうだい一緒：M=2.51, SD=.94, p<.01, いずれも中間値3との差の検定による)．逆に，女子は，異性きょうだいとの関係をより肯定的に認知している（きょうだい好き：M=3.62, SD=.81, p<.01, きょうだい仲がよい：M=3.41, SD=.94, p<.01, 楽しさ：M=3.57, SD=.93, p<.01, いずれも中間値3との差の検定による)．これらの項目では，男子ではいずれも差が見られない．

2．きょうだいに対する評定について

小学生の出生順別に見たきょうだいに対する評定について　小学生では，①ものをたくさんもっている（第一子：M=3.45, SD=.96, 第二子：M=2.65, SD=1.01 , t=5.80, df=224, p<.01)，②いろいろなことができる（能力がある，第一子：M=3.73, SD=.89, 第二子：M=2.29, SD=1.02 , t=11.25, df=226, p<.01)，③人気がある（第一子：M=3.06, SD=.92, 第二子：M=2.78, SD=1.01 , t=2.16, df=226, p<.05)，⑥成績がよい（第一子：M=3.44, SD=1.00, 第二子：M=2.66, SD=1.07 , t=5.50, df=221, p<.01)，の各項目で有意差が見られ，いずれも第一子が第二子よりも高い評定となっている．

中学生の出生順別に見たきょうだいに対する評定について

中学生では，①ものをたくさんもっている（第一子：M=3.55, SD=.99, 第二子：M=2.56, SD=1.01, t=6.75, df=186, p<.01)，②いろいろなことができる（能力がある，第一子：M=3.58, SD=.93, 第二子：M=2.54, SD=.92 , t=7.65, df=185, p<.01)，⑥成績がよい（第一子：M=3.21, SD=1.16, 第二子：M=2.22, SD=1.21 , t=5.66, df=185, p<.01)，の各項目で有意差が見られ，いずれも第一子が第二子よりも高い評定となっている．

小学生の男女別に見たきょうだいに対する評定について　小学生では，⑤家の手伝いをする，の項目でのみ，自分ときょうだいの間で，女子が男子より家の手伝いをすると評定していた（男子：M=3.12, SD=1.36, 女子：M=3.47, SD=1.12, t=2.14, df=226, p<.05)．

中学生の男女別に見たきょうだいに対する評定について　中学生では，③人気がある（男子：M=3.03, SD=.78, 女子：M=2.74, SD=.62, t=2.84, df=184, p<.01)，④かっこいい，またはきれい（男子：M=3.20, SD=.86, 女子：M=2.81, SD=.68, t=3.38, df=182, p<.01）の2項目で，自分ときょうだいの間で，男子が女子より自分を高く評定していた．

3．関与度の高低別に見たきょうだいに対する評定について

小学生の出生順別に見た高関与・低関与項目に対する評定について　小学生では，高関与項目，低関与項目いずれにおいても，第一子が第二子より高い評定を示した（第一子の高関与項目：M=3.27, SD=.69, 第二子：M=2.81, SD=.94, t=3.90, df=202, p<.01；第一子の低関与項目：M=3.29, SD=.70, 第二子：M=2.89, SD=.92, t=3.57, df=211, p<.01)．同様に，推測高･推測低関与項目いずれにおいても，第一子が第二子より高い評定を示した（第一子の推測高関与項目：M=3.43, SD=.76, 第二子：M=2.66, SD=.82, t=6.96, df=204, p<.01；第一子の推測低関与項目：M=3.29, SD=.74, 第二子：M=2.87, SD=.86, t=3.71, df=202, p<.01)．

中学生の出生順別に見た高関与・低関与項目に対する評定について　中学生では，高・低関与項目いずれにおいても，第一子と第二子の間に有意差はみられない．ただし，推定高・推測低関与項目においては，いずれも第一子が第二子より高い評定となっている（第一子の推測高関与項目：M=3.45, SD=.81, 第二子：M=2.59, SD=.67, t=6.61, df=128, p<.01；第一子の推測低関与項目：M=3.33, SD=.70, 第二子：M=2.94, SD=.84, t=2.77, df=122, p<.01)．

4．きょうだいとの年齢差ときょうだいに対する評定の関連について

きょうだいとの年齢差が，2歳以下と3歳以上の場合におけるきょうだい評定について見ると，小・中学生の出生順別に見たきょうだい評定の結果に示したと同様，年齢差の大小にかかわらず，概して第一子が第二子よりも高い評定となっている．しかし，小・中学生全体のデータで見ると，年齢差が3歳以上の第二子（N=138）は，手伝いの項目においてのみ，自らをよりポジティブに評定していた（M=3.32, SD=1.26, p<.01：中間値3との差の検定による）．年齢差が2歳以下の第二子（N=85）では，こうした傾向は見られない．

5．きょうだいとの年齢差と関与度の高低別に見たきょうだいに対する評定について

小・中学生全体の第一子の結果を見ると，第一子では，年齢差が2歳以下（N=93）および3歳以上（N=92）のいずれの場合においても，高・低関与項目，推測高・推測低関与項目の双方で，自己をきょうだい（第二子）より相対的に高く評定している．年齢差が3歳以上の場合（高関与項目：M=3.16, SD=.68, p<.05, 低関与項目：M=3.20, SD=.72, p<.05, 推測高関与項目：M=3.49, SD=.78, p<.01, 推測低関与項目：M=3.34, SD=.72, p<.01,いずれも中間値3との差の検定による）．年齢差が2歳以下の場合（高関与項目：M=3.23, SD=.72, p<.01, 低関与項目：M=3.17, SD=.71, p<.05, 推測高関与項目：M=3.35, SD=.79, p<.01, 推測低関与項目：M=3.24, SD=.71, p<.01,いずれも中間値3との差の検定による）．

これに対し，第二子は，きょうだいとの年齢差が3歳以上の場合，推測高関与項目でのみ，自己をきょうだい（第一子）より相対的に低く評定している（推測高関与項目：M=2.61, SD=.80, p<.01, 中間値3との差の検定による）．しかし，年齢差が2歳以下の第二子は，推測高関与項目だけでなく，高関与項目でも自己をきょうだい（第一子）より低く評定している（推測高関与項目：M=2.67, SD=.71, p<.01, 高関与項目：M=2.66, SD=.80, p<.01, いずれも中間値3との差の検定による）．

考　察

1．きょうだい関係の認知について

小・中学生のきょうだい関係の認知は，きょうだい仲のよさの結果に見られるように，概してポジティブである．つまり，きょうだいが好きであり，いないと寂しく思い，一緒だと楽しいと感じている．その一方で，きょうだいとはそれほど似ていないと捉えている．これは，きょうだいとの違いを感じつつも，きょうだいの存在を肯定し，そのよさを認めていると思われる．けんかをある程度していると回答していることも，互いの接触の多さを意味しており，それほど深刻なものではなく，むしろ親しさの現れであると思われる．

出生順に見たきょうだい関係認知　小・中学生いずれも，第一子の方が第二子より，きょうだいが自分に関心を示し，手伝ってくれると答えるとともに，けんかすることが多いと回答している．第一子の方が，きょうだいとの関わりをより強く意識しているように思われる．また，中学生では，第一子が第二子より，きょうだい関係を相対的に競争的と捉え，より強くきょうだいを意識していることが伺える．

きょうだい関係認知における男女差　小・中学生いずれも，多くの項目で，女子が男子より，きょうだい関係をよりポジティブに捉えている．興味や関心の類似性も女子の方が高い．したがって，きょうだいとの一体感も男子より強いかもしれない．

きょうだい構成ときょうだい関係認知について　男同士のきょうだいと女同士のきょうだいでは，概して似た傾向を示しているものの，女同士のきょうだいがよりきょうだい関係をポジティブに捉える傾向にある．また，異性きょうだいの場合でも，男子は，女子のきょうだいとの関係について距離をおき，親密さの程度がいくぶん低いのに対し，女子は，男子のきょうだいに対し，それほど距離をおこうとせず，概して肯定的な捉え方をしている．小・中学生の段階で，女子は男子より，きょうだいとの接し方

が，よりポジティブであると思われる．

2．きょうだいに対する評定について

小・中学生いずれも，ものもち，能力，成績の項目で，第一子が第二子より高い評定となっており，第一子が自己の優位性を，第二子が自己の劣位性を認めている．つまり，きょうだいが相互に長幼の序的傾向を共有している．したがって，この年齢段階では，第一子の優位性がかなり強いように思われる．

きょうだいに対する評定を男女別に見ると，小学生では，家の手伝いをする，という項目で，女子が男子より高い．また，中学生では，人気がある，かっこいい（きれい）の項目で，男子が女子より高い．中学生の男子にとって，こうした項目がより意味を持っていることを示唆しているのかもしれない．

3．きょうだいとの年齢差ときょうだいに対する評定

きょうだいとの年齢差は，2歳以下と3歳以上とに分けて検討を行った．これは，これまでの研究において，3歳以上とそれ以下とで，違った結果が見られているからである（例えば，Tesser, 1980）．ここで，特徴的なのは，年齢差にかかわらず（2歳以下であれ，3歳以上であれ），第一子は第二子よりも自己を高く評定している．きょうだいとの年齢差が2歳以下の第二子は，それに呼応するかのように，自己よりもきょうだい（第一子）を高く評定し，第一子と認知を共有している．つまり，相互に第一子の優位性，いわゆる長幼の序を認めている．これに対し，きょうだいとの年齢差が3歳以上の第二子は，手伝いの項目では，自己をきょうだい（第一子）よりも高く評定し，項目によっては，長幼の序的傾向を示さない．

このように，年齢差が2歳以下の第二子は，第一子との関係がかなり一方的になっているのに対し，3歳以上になると，項目によっては，自己が上であると評定し，きょうだいとの関係が，必ずしも一方的なものにはなっていない．その意味で，少なくとも，小・中学生段階では，年齢差がある程度離れた方が，第二子がのびのびできるのかもしれない．

4．関与度の高低別に見たきょうだいに対する評定について

関与度の違いによって，きょうだいに対する評定や捉え方に違いが見られるかどうかを検討した．自己評価維持の視点から，高関与項目においては，きょうだいよりも自己を高く評定し，低関与項目においては，自己よりもきょうだいを高く評定すると予測された．しかし，こうした予測は支持されなかった．これは，ここで取り上げた項目が全部で6つと少なく，しかも大きな枠組みで捉えがちな項目であったことがその主たる要因であると推測される．こうした場合，評定に際して，必ずしもその基準は明確とは言えない面がある．その意味では，正確なものさしが当てにくい．

また，小学生段階では，第一子と第二子との間の差が比較的明瞭で，さまざまな側面で，第一子が相対的に優位になりやすい．また，第二子もそうした力の差，第一子の優位性を認めがちである．そうしたことが，きょうだい間において優位な立場にある第一子の評定値が高くなった一因と推測される．

関与度の高低にかかわらず，第一子が第二子よりも高い評定となっていることは，いわゆる長幼の序的な傾向をうかがわせる．これは，きょうだい間でのバランスが取れていないことを示している．自己評価維持の視点から見ると，第二子は，もっぱら反映過程を享受するだけであり，一方的なものと言わざるを得ない．第二子が圧迫されているとすれば，それは，本来的なきょうだい関係とは言えないかもしれない．

しかし，こうした傾向は，小学生に限定され，中学生では，関与度の高低にかかわらず，第一子と第二子の間に有意差は見られない．つまり，年齢が上がると，出生順による差は薄れてくる．その意味で，より年齢段階の高い高校生や大学生についても検討する必要がある．

きょうだい関係の研究を展望した白佐（2004）によれば，きょうだい同士の関係は，幼少期から高齢期まで発達的に変化し，発達段階の各時期において異なった関係を形成すると想定されるという．そして，これらの変化のプロセスや各段階の特徴を明らかにするような研究は，まだほとんどなされていないと指摘している．各発達段階におけるきょうだい関係の特徴とその変化のプロセスを明らかにすることは，今後のきょうだい関係の研究のひとつの課題であろう．

また，白佐（2004）は，日本に独特な社会的風土を考慮に入れた，日本の子どもの発達にふさわしいきょうだい理論を構築することの重要性にも言及している．現代日本においては，長幼の序や男尊女卑の思想が衰退したとは言え，きょうだいの序列や男女差がきょうだい間の関係に影響を及ぼしていることがまだまだ多いのではないかと述べている．こうした側面を考慮した新たな理論化が望まれる．

さて，自己評価維持モデルからすれば，反映過程も，自己を肯定的に捉える重要な過程であり，その限りでは，第二子にとって，きょうだい関係がネガティブなものばかりとは言えないように思われる．

そして，第一子だけでなく第二子も，比較過程の回避を試みるかどうかを改めて検討する必要がある．そのためには，より詳細な項目で，より特殊なことがらに焦点を当てた項目設定が望まれる．その方が，より明確な評定が可能であり，また，より自己と結びついた評価がなされるように思われる．

本研究のデータは，1980年代の半ばに収集されたものである．したがって，長幼の序的傾向が見られたことについては，項目設定の問題も含め，改めて検討する必要がある．

この他，本研究では，自分のきょうだいにとって関与度の高いことがら，低いことがらを推測させて検討を行った（推測高関与項目，推測低関与項目）．推測高関与項目については，自己にとっての関与度の高低とは別に，きょうだいを高く評価すると予測された．しかし，推測高関与，低関与いずれにおいても，概して第一子が，第二子よりも高い評定となっており，こうした予測は支持されなかった．関与度の高低に関わる項目設定の問題（6つの項目）が，ここでも結果に影響したように思われる．

引用文献

Beach, S. R. H., & Tesser, A. (1995). Self-esteem and the extended self-evaluation maintenance model : The self in social context. In Kernis, M. H. (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York : Plenum Press, (pp. 145-170).

Dunn, J. (1983). Sibling relationships in early childhood. *Child Development*, *54*, 787-811.

磯崎三喜年（2004）きょうだい関係における葛藤の解消と自己評価維持　教育研究, 46, 65-75.

磯崎三喜年・高橋　超（1988）友人選択と学業成績における自己評価維持機制　心理学研究, 59, 113-119.

磯崎三喜年・高橋　超（1993）友人選択と学業成績の時系列的変化にみられる自己評価維持機制　心理学研究, 63, 371-378.

Manaster, G. J.,& Corsini, R. J. (1982). *Individual psychology : Theory and Practice.* F. E. Peacock Publishers. マナスター G. J. & コルシーニ R. J. 高尾利数・前田憲一（訳）1995 現代アドラー心理学　上　春秋社

塩田芳久・大橋正夫（1958）同胞関係の心理学的研究（1）名古屋大学教育学部紀要, 4, 101-107.

白佐俊憲（2004）きょうだい関係とその関連領域の文献集成　Ⅲ　研究紹介編　川島書店

Stocker, C. M., Lanthier, R. P. & Furman, W. (1997). Sibling relationships in early adulthood. *Journal of Family Psychology, 11*, 210-221.

Stoneman, Z., & Brody, G. H.(1993).Sibling temperaments, conflict, warmth, and role asymmetry. *Child Development*, *64*, 1786-1800.

Tesser, A (1980). Self-esteem maintenance in family dynamics. *Journal of Personality and Social Psychology*, *39*, 77-91.

Tesser, A. (1984). Self-evaluation maintenance processes: Implications for relationships and for development. In Masters, J. C. & Yarkin-Levin, K. (Eds.), *Boundary areas in social and developmental psychology.* (pp. 271-299). New York: Academic Press.

吉田俊和・平林　進・廣岡秀一・斎藤和志（1989）きょうだい間のセンチメント関係にかかわる要因の検討　三重大学教育実践研究指導センター

紀要，9, 17-23.

本研究のデータは，前広島大学副学長　高橋　超教授と収集したものである．ここに記して高橋　超教授に感謝の意を表する．

本研究は，文部科学省21世紀COEプログラム（グループ代表　藤田英典）の補助を得た．